

令和 7 年度
東京都庭園美術館美術資料収蔵委員会
評価部会

令和 7 年 11 月 6 日（木）
東京都庭園美術館 新館 2 階会議室

午後 1 時 58 分開会

大石課長代理：それでは、定刻より若干早いんですけれども、皆様お揃いでございますので、始めさせていただきたいと思います。

本日はお忙しい中御出席いただきまして、ありがとうございます。

ただいまから、令和 7 年度東京都庭園美術館美術資料収蔵委員会評価部会を開催いたします。

私は、東京都生活文化局文化振興部文化施設担当の課長代理の大石と申します。本日の司会を務めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

まず、本日御出席の委員の皆様を御紹介させていただきます。私から向かって左の席から御紹介いたします。

長佐古美奈子委員でございます。

加藤伊知郎委員でございます。

鈴木尚志委員でございます。

中島委員及び橋本委員は本日御欠席と伺っております。

続きまして、事務局職員を御紹介いたします。

東京都庭園美術館副館長の牟田でございます。

同じく、事業担当係長の早川でございます。

続きまして、お手元の資料の御確認をお願いいたします。

まず、会議次第がございます。次に資料 1、東京都庭園美術館美術資料収蔵委員会（評価部会）委員名簿、資料 2、東京都庭園美術館美術資料収蔵委員会設置要綱、資料 3、東京都庭園美術館美術資料収集方針、資料 4、令和 7 年度東京都庭園美術館における収蔵品購入に関する方針について、資料 5、令和 7 年度東京都庭園美術館収集候補作品一覧表、資料 6、作家・作品説明書、それと評価部会評価表がございますので御確認いただければと思います。よろしいでしょうか。

本日配付いたしました資料につきましては、委員会終了後に回収させていただきますので、御了承いただければと思います。

本委員会には収集部会と評価部会がございます。収集部会は、作品が庭園美術館の収蔵品としてふさわしいか否かについて意見交換していただく部会、また評価部会は、庭園美術館の収蔵品としての作品価格を個別の委員の方々に御評価いただくものでございます。

当評価部会で評価をお願いいたします作品につきましては、本日午前に開催いたしました収集部会において、収蔵するのが適切であるという御意見をいただいております。

また、評価対象資料の価格評価に関する議事は、東京都庭園美術館美術資料収蔵委員会設置要綱第 10 の規定により、非公開となります。

当部会の議事録については、同要綱第 10 第 2 項の定めに基づき、資料収集決定の後、公開を予定しています。公開に当たって、委員の皆様には追って内容の確認をさせていただきます。

また、委員の皆様のお名前と現職名は、東京都のホームページ上に公開をしております。

それでは、議事に入ります。

事務局から収集作品の説明をお願いいたします。

早川係長：お手元の資料で、私のほうから資料3、それから資料4につきまして、簡単に御説明をさせていただきたいと思います。

資料3、東京都庭園美術館美術資料収集方針というのを定めております。こちら令和3年に定められたものでございますが、こちらに基づきまして、資料4になります令和7年度東京都庭園美術館における収蔵品購入に関する方針についてというのを定めておりますが、こちらは昨年度と内容としては同じになっております。庭園美術館における美術資料のコレクションをより充実させるという観点で収集を行っております。

今日お諮りする資料につきましては、担当学芸員の斉藤のほうから御説明をさせていただきたいと存じます。

斉藤さん、よろしくお願いいたします。

斉藤学芸員：ありがとうございます。

皆様、配付資料とは別で、補足としてA4のカラーの用紙をお手元に御用意させていただきました。

まず、個別の作品の御説明の前に、現在東京都庭園美術館において、ルネ・ラリックの作品の収集状況についてまとめた資料となります。

今回の御寄贈いただくものと購入いただくものは全てルネ・ラリックの作品になります。現状、右側のグラフを御覧いただきますと、当館で収蔵しているものとして一番多いものは、テーブルウェアですとかメニューとかグラス、燭台などに代表されるような実用品が多数ございます。全体の47%を占めております。続いて、花瓶、男性小物、オブジェ、女性小物といったふうに続いていくんですけども、女性小物が今、一番少ない収集状況であります。

一方で、左側の令和7年度収集予定作品の内訳につきましては、まず花瓶が一番多く収集予定となっております。女性小物のほうも増えるようになりますので、これを踏まえて表面に、今後の結果想定というグラフになるんですけども、現在の収蔵状況から今年度収集予定作品を加えると、バランスのよい収集内容になるということが言えます。

また、現在当館で収蔵しているルネ・ラリックの作品の制作年について注目してみると、当館は今、17点収蔵しているんですけども、1925年以降のものが多数でして、それ以前のものとすと4点ほどしか収蔵しておりません。ただ、今回収集予定の作品につきましては、ほぼ1920年代頃までの作品が多数となっているので、制作年の面でもバランスよく収集できるような内容となっております。

まず、この資料につきましては、御説明は以上になります。

続きまして、お配りしている資料5、収集候補作品一覧表というものと、あと資料の6、作家・作品説明書のほうに移りたいと思います。一覧表のほうは全体のラインナップについてまとめているものとなります。A3の横の説明書のほうになります。今回、作品数が多数になりますので、今、この場では少し大まかに幾つか数点選んで御説明をさせていただきたいと思います。

まず1番目、購入1点になるんですけども、「花瓶《バックスの巫女》」という作品になり

ます。こちら作品説明のほうなんですけれども、1927 年にデザインされた花瓶になります。ギリシャ神話及びローマ神話に登場する豊饒と酒の神バックスに仕えた巫女たちをモチーフとした作品となっております。10 人巫女たちがそれぞれ異なる体勢で踊っている様子が表現されていて、妖艶な曲線美と緊密な構図というのが特徴と言えます。オパールセント・ガラスというオパールのような輝きを模したガラスが用いられているので、こちら見る角度によって、また光の当たり方によって色調が変化していく大変面白いガラスになっております。このガラスが薄い部分は青く透明に近い色に発色して、このガラスが厚く施されている部分は、より白く濃く発色するような特徴があります。プレス成形という成形技法を用いているんですけれども、こちらは溶けたガラスの種を型に入れて、もう一つの型で強く押すというような技法になります。それによって、巫女の裸体の厚みに変化を持たせているというふうな特徴が言えます。

今回、こちらの作品を収集候補とする理由としましては、まず、朝香宮邸はラリックの作品が多数というか、ございまして、例えば正面玄関レリーフ扉ですとか、あとは大食堂、大客室のシャンデリアの制作もラリックが担当しています。当館にとっては大変重要な作家というふうに言えることができます。

本作「花瓶《バックスの巫女》」は、1927 年にデザインされてから現在まで商品カタログに掲載されているポピュラーな作品と言えます。ラリックの作品群の中でも最も代表的な作品の一つとされます。古代神話の女性像というのは、ラリックの創作活動において重要な主題と言えて、また、当館の朝香宮邸の正面玄関レリーフ扉にも見られるとおり、こういった多くの女性像をモチーフにして創作をしております。

素材に注目してみると、用いられているオパールセント・ガラスというのは、実は 17 世紀から使われていて、1840 年代から 60 年代に一度流行しましたが、その後は下火となっていました。ただ、本作のようにラリック独自の技術の研究によって新しい表現が可能となって、オパールセント・ガラスというのは再興したという歴史がございます。

アール・デコ期を代表する作品として、今後、当館の建物公開展等のさらなる充実を図る上で、本作の展示活用が期待できるとして、今回収集候補作品としております。

収集方針としましては、先ほど早川よりありましたが、資料 3 のほうに収集対象と収集分野の分類がございます。それに照らし合わせると、本作は収集対象としては、旧朝香宮邸に関わったアーティスト及び団体が制作した美術資料として該当します。収集概要としましては、ガラス工芸に該当します。

こちらの作品の主な取引事例につきましては、書いてあるとおりになります。

他館の収蔵状況につきましても、以下のとおりとなります。

《バックスの巫女》のこちらの花瓶につきましては、購入でまず 1 点考えておりますが、ページめくっていただきまして、ナンバー 32 の寄贈のほうにも 1 点ございます。こちらは透明ガラスにフロスト加工、そしてパチネが用いられておりますので、同じ主題、モチーフなんですけれども、また違った技法を施された作品になりますので、バリエーションの展開などが、この 2 点を収蔵することによって展開できるというふうに考えております。

そのほか主だった作品の説明としましては、寄贈3番目、「グラス《六人の人物》」という作品になります。こちら制作年に注目していただくと、1911年にデザインされたものになります。ラリックはもともとアール・ヌーボー期のジュエリー・デザイナーとして大変名をはせていたのですが、1908年頃に香水商のコティに出会ってから、香水瓶のデザインを依頼されたことによってガラス工芸というものに着手するようになります。そのため1911年のこちらの作品はガラス工芸家になって転身して初期の作品になります。

作品の説明になります。ボックス付きのグラスなんですけれども、やや底が細くなった円筒形の透明な胴体部に、セピア色のパチネ技法が施されている6つの細長いパネルのような面があって、それぞれが異なるポーズの立ち姿の女性像がかたどられております。ボックスの内側にはラリックの直営店の店舗の名前が施されていますので、そこで取り扱っていたことが分かる作品になります。

こちらの作品を収集候補とする理由としましては、ラリックが、ガラス工芸家としてのキャリアを歩み始めた初期の作品ではありますが、女性像を細部まで鮮明に浮き彫らせる技術の高さがかがえます。また、箱にラリックの直営販売店のロゴがあることから、希少性も高いというふうに言えます。ジュエリー・デザイナーからガラス工芸家へと転身後間もない時期の名作の一つのため、今後建物公開展等のさらなる充実を図る上で、本作品の展示活用が期待できるとして収集候補としております。

こちらの《六人の人物》というモチーフは、ページをめくっていただいて寄贈7番目、「花瓶」の造形にも展開されています。このようにラリックは1つのモチーフから様々な用途へ展開するといったところが特徴の一つと言えますので、こういった作品も今回寄贈予定として受け付けました。

次に寄贈8番目なんですけれども、「平形デカンタ《二人の踊り子》」というものになります。こちらの作品については、技法として型吹きプレス同時成形といって、ガラス種を鋳型に吹き込みながら同時に胴体の中心部分をプレスで押さえて密着させる。そして、装飾部分を型押しするという成形法が用いられています。こちらの成形法は1912年にラリックによって特許申請されていて、本当に画期的な技法ということが言えます。丸くプレスされている胴体部の中央に2人の踊る女性像と、その周りを囲む草木の装飾が施されております。こちらは上から液体を注ぐと、表裏が密着している胴体部分の周りを囲むように流れ込むというふうになっております。ラリックの商品カタログ（レゾネ）のほうには栓のあるバージョンが掲載されておりますが、本作は栓がないバージョンになります。

こちらの作品を収集候補とする理由としましては、ラリックが本作で用いたような型吹きプレス同時成形法といった伝統的な吹きガラスの成形法と、量産を可能にするプレス成形法を融合して確立させたというのが、ガラス工芸史にとっても重要な位置づけとされます。型吹きプレス同時成形技法は、高い芸術性を保ちながらも大量生産が実現されるといった技術的な傑作というふうに本作は言えます。また、ラリック作品の中でも象徴とされる作品と言えることから、今回収集候補としております。

続きまして、ナンバー16「花瓶《茨》」という作品になります。実はこのナンバー16、17、18は同じ《茨》という花瓶の作品になりますが、用いられているガラスが異なります。

まず 16 番のほうなんですけれども、茨をモチーフとした装飾が施されていて、タイトルの原題は「R o n c e s（ロンス）」というんですけれども、こちらはバラ科のキイチゴという意味を内包する言葉になります。卵形の胴体部にやや先細りの短い円筒形の首部を持っている特徴から、一輪挿しの花瓶であるというふうに考えられます。本作では型吹き成形という、中が空洞の吹き竿の先にガラス種を巻き取って、金属の型などに吹き込んで形をつくっていく技法を用いています。そういった技法を用いながら、茨の先端まで非常にきれいに成形されていることが言えます。こちらはオパールセント・ガラスという素材が使われております。オパールセント・ガラスは先ほど説明したとおりなんですけれども、やはりラリックの作品に特徴的な一つと言えます。

こちらの作品を収集候補とする理由としましては、ラリックの花瓶群において、一輪挿しの花瓶というのは、おおむね 20 センチ未満の小型の花瓶が多いですが、本作は高さがある稀有なものと言えます。自然の主題をモチーフとした本作は、ラリックの創作の主題の真骨頂と言え、ガラス工芸家に転身後もアール・ヌーボー期の様相がうかがえる貴重な作品というふうに考えられます。

17、18 は、17 のほうは赤い透明ガラスを使っておりまして、18 番のほうは黄色い透明ガラスを使っていて、様々なバリエーションを展開していったラリックのビジネスマンとしての創作ということがうかがえます。

残り 2 点ほど御紹介いたします。

ナンバー22「花瓶《蛇》」。こちらの作品は 1924 年にデザインされた花瓶になります。右側の写真を見ていただくと分かりますが、花瓶に絡みつく蛇をモチーフとしておりまして、濃い赤い色のガラスに型吹き成形技法が用いられております。うろこの 1 枚ずつの印影がとても明確で生き生きとした表現となっています。

ラリックの作品の中にはジュエリー・デザイナー時代から活躍されていた時代から、蛇のモチーフというのは多数見られます。そして、本作はこの鋳型から複製品の花瓶も販売されております。

こちらを収集候補作品とする理由につきましては、本作は蛇のフォルムや構図と彩色技法から、ラリックの生き物への緻密な観察眼と技術の熟練性が結集した傑作と言えます。技法と材質の追求によって花瓶という用途と蛇という造形を融合させたというところから、非常に重要な作品であると考えていることから、収集候補作品としております。

最後 1 点御紹介したいと思います。ナンバー34「花瓶《パンティエーヴル》」になります。こちらはルネ・ラリックの制作としておりますが、デザインはその娘であるシュザンヌ・ラリックがデザインしたと考えられています。

娘のシュザンヌ・ラリックはアヴィランド社というリモージュ焼の名窯なんですけれども、この磁器デザイナー、そしてまたコメディイ・フランセーズの舞台装飾家としても活躍していました。ラリックの妻であるアリスの死後、長きにわたって創作の面でも父を支えた存在と言えます。

す。

まず、作品の説明になります。パンティエールとは、フランス・ブルターニュ地方の海岸線の名前です。幾何学的な魚のフォルムや構図、そして水の流れを感じさせる波線など、アール・デコ期に典型的なデザインと言えます。こちらの作品はもともと 1926 年に試作品としてデザインされていて、その際は少ない数で生産されました。当時は型吹き成形で、底はフロスト仕上げ、装飾は酸蝕彫刻でしたが、本作ではパチネ技法を用いて魚と波の印影ですとか濃淡を表現しております。

こちらの作品を収集候補とする理由としましては、まずデザインをしたとされるシュザンヌ・ラリックは、父ラリックの創作を支える存在かつ自らもアヴィランド社で食器などのデザインを手がけたアール・デコ期の重要な作家です。本作はそのシュザンヌがデザインをし、ラリックが制作した共同作品と言われますが、近年の研究においてはラリックの作品はシュザンヌの原案を基に制作されたものが複数あるということが明らかになっています。本作はアール・デコに特有の幾何学的な装飾と、水中にいるかのような不透明なガラスの質感を型吹き成形という技法によってダイナミックに表現しております。父ラリックと娘シュザンヌの共同の作品として名作と言えるので、収集候補予定としております。

こちらにつきましては、収集方針がこれまではイとウというふうに書いてあったんですけども、こちらは収集対象のほう gau というふうになっておりまして、これはアール・デコ様式との関連を有する美術資料というところに該当しますので、本作だけそのようになっています。

以上、主要な作品の説明をこちらの資料を基にさせていただきましたが、この後、実際に作品を実見いただく際に、全ての作品を御覧いただければと思います。

以上になります。

大石課長代理：何か御質問はございますでしょうか。お願いいたします。

加藤委員：タイトル英語表記と日本語表記とフランス語とですか。

斉藤学芸員：ありがとうございます。

今回、基本的には原題を日本語訳できるものについては日本語をしておりまして、英訳のほうは原題を英訳できるものは英訳にしております。固有名詞はそのままフランス語のカタカナ読みをあてています。

加藤委員：結構ミックスされている。

斉藤学芸員：そうなんです。そこは統一したいと思います、今後。

加藤委員：フランス語読みのほうが一般的ですね、ラリックの場合。だから、英語に無理やり訳しちゃうと違和感があるかなと。

斉藤学芸員：ありがとうございます。

大石課長代理：ありがとうございます。

ほかに御質問ございますでしょうか。お願いいたします。

長佐古委員：この委員会で何うことじゃないかもしれないんですけども、これ全部寄贈ということなんですか、1 か所から。

牟田副館長：1 点が購入でありまして、あとは残り御寄贈ということで、実見の際に御説明します。

長佐古委員：ありがとうございます。

大石課長代理：ほかに御質問よろしいですか。

では、実見したいと思いますので、お願いいたします。

（ 委員離席 ）

（ 作品検分 ）

（ 委員着席 ）

大石課長代理：それでは、作品のほうを御覧になりまして、何か御質問はございますでしょうか。よろしいですか。

それでは、評価方法の説明をいたします。

評価表に金額を記載していただきまして、A 4 横のこちらの評価表に金額を記載していただきまして、最後のページに署名をいただく形になります。

評価額の最高価格と最低価格を除いた残りの平均値を評価額といたします。金額は税込みのものを御記載ください。

評価方法について、何か質問はございますでしょうか。よろしいですか。

それでは、お手元のボールペンで御記入をお願いいたします。

鈴木委員：1 番はもう購入決定ということ、これからなんですか。

牟田副館長：収集は決定しているので、あと幾らで取得するかというのをこの部会で。

鈴木委員：分かりました。

円マークは要りますか。

大石課長代理：大丈夫です。

御記入がお済みになりました方は、事務局が確認いたしますので、お声がけいただければと思います。確認が終わりましたら、御退席いただいて結構でございます。

冒頭に御説明させていただきましたが、お配りした資料一式は回収いたしますので、机の上に置いたままにしていいただければと思います。

本日はどうもありがとうございました。

（委員評価表記入・回収）

午後 3 時 42 分閉会

以上